「みどりがおか」

令和6年6月26日（水）
第28号（文責：安藤真二）

「欠け茶碗」

欠け損じた茶碗のことを「欠け茶碗」という。幼いころ、実家にも茶碗の真ん中あたりまで、欠損とひび割れがある物が現役で活躍していたのを思いだす。

（博多湾上空　JAL 機から 2024.6.13）

欠けているのに、申し分なく役割を果たしている。でも、きっと洗う時には、かなりの神経を使ったのではないか。

当たり前のように使ったころは、何とも思わない私だった。母がきっとそうしていたのだろう。

（アガパンサス　延岡市出北 2024.6.12）

（ブーゲンビリア　延岡市緑ヶ丘 2024.6.13）

「私は実は誰の人生も欠け茶碗だと思っている。健康、能力、性格など、問題を持たない人はいないのだ。」

（曾野綾子『人生の原則』より）

60 年以上の人生を送っていると、そうだよなと素直に受け止めることができる。

私たちの人生は、自分の「欠け」とどう付き合うか、仲良くするかで、鮮やかにもなり色あせることにもなるのだろう。

（マリア様　延岡市緑ヶ丘 2024.6.12）